

後選百人一首評註緒言

世に後選百人一首と云者を傳ふ、其開卷に、建武の亂より、君臣上下心々に九重をいで、都近きしるべの方へ退給ける中に、後普光院攝政殿下良基公は、嗟峨の中、院に、世の塵を避けおはしましける時、京極中納言の跡にや倣はせ給けん、天曆の帝より、その頃の君臣に至る迄を、おぼし出づるまゝに、その時代のあこさきをも序で、御心によしとおぼすまゝに、書集め置かせ給けるを後、中院關白顯實公殿下補はせ給て、後選百人一首と名付けるを、長門國の阿武の春日社の宮司波多野某か家に傳へたりしを、寫得て梓に刻むことにはなりぬと見ゆ、群書一覽には、後普光院攝政良基公、元亨正中の亂より、世の中靜かならぬを厭はせ給ひ、小倉二尊院の傍に引籠り給へる頃、京極中納言定家卿の故事をおもし出給ひ、小倉百首にならひて、續百人一首を選出給ける、それが中、六首むしばみ朽て亡ひたるを、中院關白顯實公わらひ添へ給ひしを、今は後選百人一首と名付て、人間に傳へたる也、云々と註して、右は傳記の文を略したる也と云り、彼是合見て、其由來明なり、

猶おのれがみし本に、序文ありて、寶政申歲霜月中の二日、大き三の位さだ直記すとありて、一首毎に、註釋を施せり、定直卿の註にや、春日、社の宮司より端書を乞ひつる由は見ゆれども、註釋を加へたりとも見ゆされは、それとも定めがたしや、其註を見るに、味氣なき註なり、今、人の乞ふまゝに、まだ見ぬ人にも示し、且はまた歌學研究の一助にもとてあらく、評註を新に加へつとす、その中三首虫ばみて見えされば闕く、他日その本を見れば、さらに加ふべし、選の字は原書に皆撰とかけとも誤なれば改めおく、

辛丑歲春如月立春の日

稼堂陳人識

後選百人一首評註

村上天皇

影見えて汀にたてる白菊はをられぬ波の花かこそみる

たてるは、たちてあるの約りたる也、現在にかゝる詞也、影は見ゆれど、手には折られぬ、となり、古今に、「谷風に解くる氷のひまごどに、打出づる波や春の初花とあり、これを翻案し給へる也、白菊の字、波の花に映す、

惟良親王

白雲の絶えず棚引く峰にだにすめは住ぬる世にこそ有けれ

たにの下に、も文字を加へて見るへし、峰なりとも意也、假定して云なり、すめはすみぬるは、すめばすまるゝなり、深山の奥といふとも、住めはすまるゝ物なれば、分に應じて奢るへからず、と戒め給ひしにもあるか、そはこそけれの詞にて知らるゝ也、

常盤井入道太政大臣

沖津風吹しく浦のあしの葉の亂れて波にぬるゝ袖かな

波にまては、ぬるゝ袖哉をいはんの序言也、この体、古歌に多かり、亂ての詞に、心の亂るゝをいひ、波の字に、涙の字を見せたり、此様の歌は、何れもその譬となる詞の下に、やうにの詞を加へて心うへし、芦の葉のやうに、心亂て波にぬるゝやうなる袖かなとなり、

祝部 成光

咲花のおのが色にやうつるらん千種にかはる野べの夕露

こゝろに色なし、迷によつて色を生ずる、種々なり、一の心を種として、萬の言の葉とそなれりける、何れに見ても宜しからん、名歌には、おのつから一種の理想を含む、斷章取義は、その人の活用にあり、此歌さく花に種々あり、故に夕露に種々の色を生ず、おのが色と云る、着眼、且本末の中間に、千種にの詞を点じたる、一首の關鎖

入道二品親王道助

萩の葉に風の音せぬ秋もあらは涙の外に月はみてまし

秋もあらはと、未來にて起り、みてましと未來にて結ふ、首尾の掛合を見るへし、感尤深き歌也、涙の外にといふにて、常は涙の中に、月を見る意、知られたり、

法印 公順

心をもあとをもとめずあくがれてあはれうきみの友千鳥かな

うきみの友とすへき者は、この千鳥のみ也けりと、嘆息したるを、千鳥は多くむれたつ物なれば、やがて友千鳥と云かけたる、筆尤敏也、その嘆息したる意は、あはれと云、かなと結びたるにて明也、心をもより、うきみ迄は、作者の身上にも、千鳥の身上にもかけて、見るへきなり、

權中納言公經

高瀬さす六田のよごの柳はらみとりもふかくかすむ春かな

六田の淀は、大和の名所也、春水の一時に漲來たるに、柳色青々として、霞のこめたる景色、畫くがごとし、水深し、故に縁も深くと云し也、ふかくの詞、六田の淀を受て、尤力あり、高瀬は高瀬舟也、

法橋顯昭

鷺の山いかにすみぬる月なればいりての後も世をてらすらん

鷺の山は、靈鷲山を云、釋尊を月にたとへし也、さて月の入るに、佛の入滅をたとへし也、佛徳の後世を照せるを見て、佛の靈鷲山にて説法ありし時の威徳を、おもひやりてよめる也、入の字を出して、山を出づるの出の字をかくし、すみけるの詞を出して、濁の字をかくして、それと見せたる、老筆味ふへし、山、月、世は骨也、すみ、入り、照す、は肉なり、

後光嚴院

心たに通はゞなごか鴉鳥のあし間をわくる道もなからん

道ものものは、の。もじに改むへきにや、精神一到、何事不成の意、これに叶へり、だには、俗に云ダケといふ詞にて、能く通す、ダケは、だにより轉じ出たる詞也、

鴨長明

吹登る木曾のみ坂の谷風に梢もしらぬ花を見るかな

みさかのみは美稱也、みよしの、みと同じ、みこしぢといふみも同じ、高峻なる坂ゆるに、美稱を付する、古の例也、漢字にてかゝば、峻坂ともいふへきにや、幾千尋とも測られぬ、木曾の谷合より、山風の花を吹たつる絶景、寫得て玄妙壯快、一幅の畫にかゝせて、壁にかけまく覺ゆ、長明が花のふゞきに絶倒したるさま、かなの詞にてしられたり、梢もしらぬ、尤妙、これにて、深谷のさま、宛然目に映す、

後普光院攝政太政大臣

唐衣たもとゆたかにつゝむかな我身にあまる君か恵を

唐衣とは三韓の服装を用られし頃の稱也、今時の洋服といふに同じ、後に至ては、衣の美稱となれり、韓衣を用ひぬやうになりし後の事なり、古今に「うれしさを、何に句まん、唐衣、袂ゆたかにたてといはましを、とあるを、本歌にしてよめる也、古今のと同様なれど、情境自ら異なり、古今のは、おもひがけなきに、君の恩賜に預りしを、辱なくおもひてよめる也、良基公のは、位人臣を極めたる人なれば、袂ゆたかにつゝむ哉と云る也、その虚實を知るべし、身にあまる、袂ゆたかに、呼應妙なり、歌もすへて上下

の照應をよく味ふへし、國學者は文法に疎なり、故に隔靴搔痒の解多し、

花園院

百敷にうつし植ゑてそ色そはんはこやの山の千代のくれ竹

藐姑射^{はこや}は、仙人の山、よつて仙洞御所をたごへて云る、常也、一天万乗の君も、その御位をおりさせ給へは、物事すへて物寂しくなり給ふ故、仙洞に千代も榮えん吳竹も、禁中にうつしてこそ、色添はめと、仰せられしなるへし、御讓位の後の御製には、この類多かり、はこやは、上の百敷に對す、百敷の大宮といふへきを、後には、只も、しきとのみいふこともなれり、廣間をいふと知るへし、

法印淨辨

幾夜わか家路忘れて斧の柄の朽木の柚の月を見るらん

花に戯れて、家路を忘るゝはわろし、家路わすれて、柚山の月に、心をすますはよし、此歌は、佛道に實の入りたる由をよめるなるへし、斧の柄の朽木のとかゝりたる、大によし、掛詞は、耳にさはらぬがよし、故意めきたるは、宜からず、朽木の柚は、近江の

名所と云り、おもふに、比枝山をさしていふなるへし、斧の柄の朽たる、晋の王質が故事なり、

權大納言資明

朝日山まだ影くらき明ほのに霧の下ゆく宇治の柴舟

朝日山は、うち川の上にあり、朝日を、朝日山に言負せて、まだ暗きとよみ流したる、捷筆也、きりの下ゆく、尤妙、宛然一幅の活畫圖

禎子内親王家攝津

ゆく秋のたむけの山の紅葉はかたみばかりやちり残るらん

秋のたむけしてゆくと云を、手向山に云かけたる也、手向山は、大和の名所也、山の神に、たびゆく人の手向くるは、幣也、すきゆく秋のたむくるは、紅葉なり、たむけは、ゆくを受け、散りは、紅葉を受け、残るは、形身を受く、是一首の鎖也、

藤原忠房

きり／＼すいたくな鳴そ秋の夜の永き思は我そまされる

蛩もなく、我もなく、なくにかはりは無けれども、思におとりまさりあり、これをことわる也、はもじ、ぞもじ、一字千金なり、永き思にも、色々あり、故にはもじを下して分ちしなり、蛩よりも我一段まされりといふ意故、ぞもじを置て、重を我に歸す、例の聲きく時ぞ秋はかなしきといへるぞもじはもじと同一の格法なり、味ふへし、これを詩に譯せば、暗蛩莫苦吟、秋思我最永、といふへきにや、ぞもじは、此最の字に當る、その啼を止むるは、なけは、いよ／＼永き思のまさればなり、

光明峯寺入道前攝政左大臣

年へぬる淀のつぎ橋夢にだに渡らぬ中と絶えや果なん

淀の繼橋は、津國の名所也、中とは、多くは夫婦の中を云也、夫婦の約して、久しく逢はぬより、その中の絶えもやせんと、歎きけるを、年をへし淀の繼橋の朽果て、渡られぬやうに、なりけるに、たごへて云ける也、つぎ橋と云も、面白し、夫婦は、他人のつぎあはせにて、兩方よりつぎ合せたる橋のことし、故にこれを引ける也、繼橋といひ、渡らぬと云、中と云、絶ゆといふ、いつれも、夫婦の縁語也、その蟬聯して下るを味ふ

へし、たには、上に解せるごとく、夢の中になりとも、あはば慰むへきに、それさへ叶がたしとの意なり、

馬内侍

ちはやふる加茂の社の神もきけ君忘れすは我もわすれじ

ちはやふるとは、いはやふるの約りたる也、ふるはあらふるのふるにて、奮ふと同義也、武勇にてまた神の形容詞也、我朝の神々は、何れも武勇にましますは、神の冠詞には、いつも此詞を用ふる也、きかせ給へといふへきなれど、歌なれば、きけと云也、神に誓をかけて、わすれじとなり、抑君忘れすは、我も忘れじとは、甚いふかひなき詞也、かゝる人ならば、君忘れなば我も忘れんといふへし、人々たらずとも、我我たらさるへからす、これらは風教の益にならぬ歌也、いかでか選に入るへき、かゝる歌よみて、加茂の神も納受し給ふとおもひしにや、道をしらすれば、かやうの歌も、よみ出づる也、後進の徒心得おくへし、右の句、君わするとも、我は忘れじと改めて、おかまほし

山階入道前左大臣

久方のあまてる月のかつら川秋のこよひの名に流れつゝ

月の桂といふを、山城の桂川に云かけたり、月の桂の影うつりて、川の景色の面白さ、殊に桂川も、秋の最中の月のかつらの名に、むかしより流來たる名所也といふを、省きてとめたるなり、

覺延法師

住吉の松のあらしもかすむ也遠里小野の春のあけほの

遠里小野は、住吉に續きたる所なり、春の曙は、何もかもかすむゆゑ、あらしもかすむと云る也、も文字の用ひやう、心うへし、かすむの詞を受て、遠里を出し、遠里の地名にて、春曉遠村のけしきを寫せる手段、いと巧也、殊に歌の調、さら／＼とよみ下して、その景目にあり、初學ひの者は、此様の體をまづ學ふべき也、

平親清女

とにかくに憂きは此世のならひぞと思へは身をも恨みやはする

是は、女ながらも、悟道の歌也、とやかくと思ふ時、此の歌をうちせずせば、一服の清涼

散にやあたりぬへき、身をもと云るは、人に對してなり、人をも身をも、うらみざらましと云る心と同じ、やはと重くかゝる故、反語となる也、

平維貞

橘のにはひをさそふ夕風にしのぶむかしぞ遠ざかりゆく

「さつき待つ花橘の香をかげば、昔の人の袖のかぞする」と古歌にありて、昔をしのぶ故事とはなれる故、この歌も去方に云る也、夕風に誘はれて、匂の遠ざかりゆくやうに、忍ふ昔を遠ざかりゆくとなり、一言にて兩意を言ふ、歌の妙處也、來る者は日に親み、去る者は日に疎しとかや、とかく人情といふものは、此境を出がたし、此歌三復して戒とすへし、

入道贈一品親王尊圓

幾度も書きこそやらめ水莖の岡のかやはら靡く斗に

是は、戀の歌にて、幾度も水莖の文こそ書やらめ、かや原の風になびくやうに、おのが方へなびく斗にとなり、水莖の岡は、江州の名所なり、水莖とは、水中の草の莖を云也、

筆を水莖といふは、硯の海にひたすは、水草の白莖を、水中にひたせるに似たれば、云ふなるへし、此歌は、取て立志の教にもすへし、さても尊圓親王の書に於ける、支那の二王をあけくれ學はせ給て、さて後一派の和流てふ書法を立給ひ、それより無數の法門、開けきて、假名かくものは、萱原の、風に靡くかごと、御家流に従はぬものもなきやうになれりしは、豈親王のいくたひとなく、水莖を潤して、かきやり給ひし功ならずや、されは、この歌は、やかて親王の自道とも稱奉るへきにや、

藻壁門院少將

おの、か、音、に、つらき別のありとだにおもひもしらで鳥や鳴らん

おのか音は、雞の方に就て云也、ありの上に、人の字を加て見るへし、思ひものゝは、感詞也、思ひしらでマアといふにあたる也、雞なけは、男女互に別れゆく、そのつらさを知らでとなり、今の世にも、かゝる歌よみて、あかつきの別れをしむ者もあるへし、將又「おのか音に、ねさめぬ人の有とだに、おもひもしらで鳥や鳴らんと、朝寝する懶惰生もあるへく、「おのか音に、曉急く我としもおもひしりてや、鳥のなくらんと奮立て、

朝起する人もあるへし、おの／＼その情のありのまゝをよめるが歌也、心ある者は、教とも戒めともしつべきなり、

藤原重頼女

逢ふ事はおもひ絶えぬる曉もわかれし鳥の音にぞ泣るゝ
再逢ふ事は、おもひ絶えぬる曉も、わかれし時の鳥の音に、今も泣かるゝとなり、男女の戀のみならず、男子も、千載の一遇、一たひ去りて、再あひかたき、その時の事を思出つれば、此情抑へがたからん、音になくと云、音のみぞなくと云などは、皆音をたてゝ鳴く、音にたてゝのみ鳴くといふを、省きたる也、こゝも、音にたてゝ泣かるゝを、鳥の音に云かけたる也、あかつきものは、あひて別るゝ時、泣きしに對してなり、

西園寺前太政大臣

住吉の松も我身もふりにけりあはれとおもへ秋のよの月
二葉の時より、松の素性を知れる物は、空ゆく月なるへければ、あはれと思へと、云さるごと也、我身のふりゆくを知れるは、知己にあり、知己の世になくば、月に訴へざるを

わす、西園寺公、知巳なかりきや否や、あはれに情深き歌也、

勝部師綱

等閑におもひし程やつゝみけむうらみにあまる袖の涙を

うらみにあまる袖の涙を、等閑におもひし程や、つゝみけむ、今はつゝみもあへず、涙こぼるゝとなり、あまるの詞、つゝむの詞に映して、全篇過去の事をいひつらねて、現在の事をうらみにあまる云々の詞の中に含めたり、味ふへし、情の切になりゆく様、よくうつせり、

前參議爲秀

たちこむる霧のまがきの夕月夜うつれは見ゆる露の小草

垣は、物を隔つる物、霧も隔つる物故、たごへて、霧の間垣と云也、霧のたちこめて、まがきのごと、隔てたる夕月夜にさへ、影うつれは、露の小草は見ゆる也、おもひやりの心だにあらは、人の心は、いかにへだつとも、すきくゝと見ゆる也、聖人の忠恕を貴ひ給ひしは、此心也、詞幽にして旨深し、

小侍從

沖津風ふけるの浦による波のよるこも見えす秋のよの月

沖つのは、助語也、今の世に、沖の風をいふに同じと解する者あれと、さにあらず、たゞさる心に見ゆる也、ふけるの浦は、和泉の名所也、名所のふけるを風のふく、波のよるを夜にいひかけたり、見えす詞をきりて、秋のよの月と云へば、下にすみわたりて、みゆるかなといふ心を、含めたる格となりぬへし、されども、猶よるこも見えぬ秋の夜の月としたらんどよろしかるへき、近頃肥後藩儒秋山玉山が、江月といふ題にて、よめるをみたり、その歌に、「村蘆は、ほのかに見えて、白波のよるこもわかぬ難波江の月とあり、此歌、小侍從のに、遙まされるやう覺ゆ、いつれも皓月を詠じたる也、

藤原範綱

住吉の淺澤小野のわすれ水たえくならであふよしもがな

淺澤小野は、住吉の地名也、忘れ水とは、木蔭、草蔭などにありて、たわくゝにみわたたしかにありともみえぬやうの水をいふと云り、逃水といふとは、異也、上の句は、譬

なり、忘水のごとく、わすられて、絶えくにならぬやうあふよしもがなと也、結の詞は、もがなとて、願の詞也、ありてがな、してしがななど、みな同じ、今の詞にも、かやうにしてもらたいがなといふは、これ也。是も戀の歌なるへし、

平泰時朝臣

おもふには深き山路もなき物を心の外に何たづぬらん

起句、世を逃れて隠れんとおもふにはと心うへし、世には、種々の隠者あり、朝隠、野隠、山隠、市隠、吏隠など、是なり、修行のつまざる人は、山にかくるへし、心に隠るゝ處ある人は、市にても、吏にてもよし、これを不隠_ニ於境_ニ而隠_ニ於心_ニといふ、されども、修行をつみたる上の事なり、たやすく學ふへきにあらず、これを口實にする者あり、いはゆる利口飾非といふものにして、おそるへし、憎むへし、此歌は、心隠をのべたるなり、されとも、泰時はその人にあらず、口に手をあつへし、抑人をもてその言を廢せすともいへは、存すへしや、

法眼行濟

戀しのふむかしの秋の月影を苔の袂のなみだにそみる

身は出家すとも、心出家せざる時は、かやうのこともあるへし、未鍊の歌也、苔の袂は、世捨人の衣をいふ、一首の意は明也、

前大納言爲家

鐘の音は霞の底に明けやらで影ほのかなる春の夜の月

此歌は、春夜の朧月を詠じたるなるへし、かねの音は深くこめたる霞の底に、聞ゆれども、明の鐘ならず、まだ夜ふかきに、影のほのかなる春のおぼろ月夜の面目さよとなり、明方になれば、月の影も、ほのかにみゆる物也、今は明やらで、仄にみゆ、おほろ月なればなり、月のおほろなるは、かすみたてばなり、故に上の句に、霞をおきし也、かねの音を、明やらでにて、抑へ、明やらでを、春のよの月にて留め、かすみよりほのかを出し、そこよりあけをいたしたる、一罅のうつへき所なし、爲家卿は、近古の大家にて、その家集を、座右におきて、歌はならふへき由、古人も云り、

坂上明兼

吳竹のをれふす音のなかりせば夜ふかき雪をいかでしらまし

歌の意明也、雪のしづくと、風もなき夜にふる時は、げにもかくのごとし、雪國になれたる人ならでは、此歌の味は、薄かるへし、夜ふかき雪といふ、一篇の見所也、

兼好法師

手枕の野への草葉の霜がれに身はならはしのかせの寒けさ

手枕の野は、大和の名所也、小野家集に、「手枕のすき間の風もつらかりき身はならはしの物にそありけるとよめるを取て、旅宿をよみし也とぞ、霜枯時に、旅寢すればの意なるを、上の手枕の野の詞にもたせて、こゝに省きし也、下の句は、身はならはしといふ物の、風の寒けさよとの意なり、小野の歌に比ふれば、下ること數等、且僧の身分にしては、め、しき歌なり、

藤原秀能

夕月夜汐みちくらし難波江のあしの若葉を越ゆる白波

くらしは、來タツサナの意也、はきこみえぬ也、只白波のたつにて、さおもはるゝなり、

夕月夜と、白波と、相映して、その趣は、隱約の間にあり、

宮内卿永範

曇りなき鏡の山の月をみて明けき世をそらに知る哉

鏡の山は、近江の名所也、聖徳を鏡の山の月にたこへて、仰奉る也、そらは月を受け、明き世は、くもりなきかゝみを受く、上句は譬、下句は實、そらの詞力あり、

衣笠内大臣

白波のかけても人に契りきやこの浦にのみみるめかれとは

是は、戀の歌也、契きやは、反語にて、契らさりきとなり、やは、切るゝ詞の下におく詞也、心えおくへし、こと浦には、よその浦也、みるめかれは、海松和布刈れなり、これに見る目離れの意をかけたる也、人目も草もかれぬと思へはのかれと同じ、先に逢し時、よそのうらにのみ、海人のみるめ刈るごとく、見る目離れとは、白波のごとく、未かけても、その人には、契らさりきと也、白波、こと浦、みるめかれ、一首の呼應也、結ひのは文字は、必逢はんといふ心に對して、おきしなり、心つくへし、

前中納言爲相

玉藻かるかたやいづくぞ霞たつあさかの浦の春の明仄

玉は、藻をほめたる也、淺香の浦は、津國の名所也、霞たつ、一首の骨子也、意は明也、海人のといふ詞を、玉藻の上に加へて見へし、風調雋永、幾度吟すともあかじ、

津守國冬

郭公しのふのみたれ限ありて鳴くや、さつきの衣手の杜

郭公の四月に鳴くを、忍音しのひねといふ、衣手の杜は、山城の名所也、郭公もなく時節に限ありて、今はえ忍ひず、音をたて、みだれに鳴くにやあらん、さつきの衣手の杜にと也、「春日野の若紫のすり衣、忍ふのみたれ限しられすといふを、本歌にとりなしてよめる也、衣手の杜を引しは衣にししのふすりといふがあれはなり、又みたれなくといふへきを、本歌によりて、詞を割りて用ひたり、本歌の取様、上下の照應、味ふへし、

後照念院關白太政大臣

つゝみえぬ涙なりけり郭公聲をしのふの杜の下露

信夫、杜は、陸奥の名所也、しのふの杜の下露は、郭公のしのひ音になきて、つゝみえぬ涙なりけりといふを、しのふの杜にかけたる也、涙なるらんといひたし、

安嘉門院四條

庵しめて住むとは人にみえすとも心の内の山かげもがな

山陰に、庵しめての意なり、下に山かげをめぐらして、それにて見せたるなり、この歌は、前の平泰時が歌と同意なり、

藤原資隆朝臣

時雨かときけは木の葉のふる物をそれにもぬる、我袂哉

一首の意は、解をまたさるへし、木の葉の雨にも袖を濡らす、何等の哀惋、それにも詞、筆力扛鼎

冷泉前太政大臣

池水にますみの鏡影そへて塵もくもらぬ秋の夜の月

ますみの鏡とは、すみきつたる鏡といふ意也、まは美稱なり、是に月をたとへし也、池

水も、すみわたれる故、影そへてと云也、かゝみといふ故に、ちりもとうけたる、ちりほごもの意なり、玲瓏澄徹、一点の塵もなき歌なり、

源 雅 光

世と共に戀渡れども天の川あふ瀬は雲のよそにこそあれ

世は、わたるといふ故に、世とともにと云る也、川の水は、瀬のある所にて、あるは別れ、あるは逢ふ物故、またも逢ふ瀬など、譬て言うること、常也、こそあれは、あふせは、よそにこそあれとも、こゝに戀ふる人にはあはすととなり、わたる、逢瀬、雲、みな天の川の縁也、

前左兵衛督教定

うつゝには語る便もなかりけり心のうちを夢に見せばや

うつゝは、現在まのあたり也、夢には、ゆめになりとももの心也、忠臣の讒言にあひて、上天閻を叩きて、孤忠をあらはさんと欲すとも、よしなき時など、必此情懷は有へし、うつゝに、ゆめ、かたるに、見せばや、雨々反映せり、

平 頼 泰

來ぬ迄も待つはたのみの有物をうたてあけゆく鳥の聲哉

とひくべき人の來ぬに、極りたる時迄も、待つはたのみの有物を、うたてや鳥の曉を告ぐる事哉と、鳥を恨みしなり、知己の來んを、一夜まち困じたる時など、誰も此心ばえはあるへし、

大 江 茂 重

橋立や松吹きわたる浦風に入海とほくすめる月影

橋立は、丹後の名所也、吹わたる、すめるにて、雲の風に吹拂はれて、月のはれ出つる景色、みえたり、

藤 原 業 清

誰となき宿の夕を契にてかはるあるじを幾夜とふらん

初の句は誰と定めたることなき也、是は長旅の心を詠る也、昔東海道五十三次の宿々をすぎて、江戸に下るに、十余日の間、毎夕契りたることく、十餘人のかはりたる主をと

ふ、その間の旅境、愁境、苦境、勞境、いかばかりそや、これを悉くいひ盡したるが、此歌の妙處なり、その尤妙なる處は、夕を契にてと、實を離れて、虚に就き、以て客中無聊の情態を寫せるに在り、讀む人、その句々倒裝法を用たるを味ふへし、是を「誰となき夕の宿を契にて、幾夜かかはるあるしとふらんといはゞ、いかに、是にてその巧拙をしりぬへし、

源 忠 孝

葉かへせぬ松のひまよりもる月は君か千とせの影にそ有ける

松もかはらす、月もかはらす、月にも影あり、松にも陰あり、是やがて、君の御蔭なり、數ならぬ我等まで、此御蔭の下に、豊にすめる嬉れしさよとなり、松にかはらぬを言て、陰を省き、月に影を言て、かはらぬを省く、互文の法なり、はた下の句の千歳は、かへせぬを受け、影は葉を受けとめたる、大によし、色かへぬと、常いふなるを、葉かへせぬと云るも、是か爲なるへし、

源 兼 泰

うしごみし人よりも猶つれなきは忘らるゝ身の命なりけり

つれなきは、俗に云、鐵面皮にて、うきめを見せたる人の鐵面なるより、人に忘られて、生きて居るかひもなしとて、死なれもせず、猶永らふる命は、一段つれなしと也、是は男女の道にもよらず、貴賤の位にもよらず、世にかゝる者、幾人といふ數知らず、あること也、世の中をあやつりわさのやうにして、いつもよく人の上に位をしめ、扱君の明をくらし、國の勢をそこなひ、よもやもより惡まれ、譏られ、退けられても、腹かき切て、死なん勇氣もなく、俗に云、冷飯食ても、娑婆にをりたしといふ者のつれなきは、げにもその身の命なりけり、今日は尤鐵面の目をつく斗の世の中なれば、このやうの述懐は、各あるへけれども、さりとも、その口よりつゆいひ出てぬは、今ははや鐵面の皮も幾枚をか重ねらん、豈浩歎の至ならずや、

藤 原 時 房

きゝすなくかた野のみのゝ花薄かりそめに來る人な招きそ

交野のみののは、河内の名所也、かりそめとは、さして心なきをいふ也、狩をかりそめに

かけたり、この野には、雉子の鳴てゐるほどに、何の用意もなく、狩せんとてくる人は招くなよ、と花すゝきに告ぐる也、世の中には、私の慾のために、人の手前をも思はず、あらぬ業するもの、多かり、養民の任に當れる人などは、朝夕此歌を三復すへし、吾京にありしとき、雲畑の村民にこの種の累をかゝること多しときけり、

前大納言良教

諸共にみしをかたみの月だにも朽なは袖に影やたえなん

諸ともに見し月を、形見とおもひて、今も詠むれども、其月を見るに付て、涙のこほるゝに、袖も朽なは、かたみの月の影も、後には絶果てやせんと歎きたる也、あはれに情深し、月たにもは、月にだにとあるへきにや、こゝは、月を見るだにも、涙のおちて袖の朽ぬへき由也、おもふに、親子、夫婦、兄弟、朋友、死別の後は、必この悲境は、ある事也、

女御徽子女王

袖にさへ秋の夕はしられけりきえし、浅茅か露をかけつゝ

夕の字の下に、かなしさの詞を加へて見るへし、浅茅は、ちばなといふ草のこと、あまり深くは、しげらぬ故、浅とは云也、秋の夕くれに、浅茅か原を過行けば、露の袖にかゝりて、消ゆくにつけて、秋の夕のかなしさは、しられたりと也、意到て筆到らぬ歌也、

前右兵衛督爲教

くもりなき影もかはらす昔みしまゝの入江の秋のよの月

真間の入江は、下總の名所也、影ものもは、まゝの入江に對へてなり、月影も、入江も、かはらす、昔みしまゝ也といふを、真間の入江にかけしなり、影にかはらすといひ、入江にみしまゝをかけたる、自然の照應にて、一氣呵成の作也、

紀 淑 望

もみちせぬ常はの山は吹風の音にや秋をきゝわたるらん

常盤山は、山城の名所也、常盤は樹にいひかけたり、ときはゝ、とこしなへの意也、はもじは、語助也、よはのはと同じ、夜半とかくは、假名也、常はの山にすめる人はと、上句を解すへし、それにて一首の意は明なるへし、

三條院女藏人左近

君はかく忘貝こそ拾けれうらなき物はわかこゝろ哉

君こそは、浦の忘貝のやうに、我を忘れ給へども、我は忘貝を拾ふへき浦のなきやうに、心にうらなく君を思ふとなり、浦に裏をかけたる也、貞女の心、かくのことくなるへし、先の馬内侍の歌とは、殆ど雲泥なり、さて此歌のこそけれにて、さらにその用法を悟るへし、反對の意を強くいふ時に用ふる詞也、故にけれの下には、ごもを加へて、義理をどること多かり、

辨 内 待

思ふ事いはで心のうちにのみつもる月日を知る人のなき

思ふ事の積もるを、月日のつもるにかけたり、下の句切れぬ詞にて、とめたるは、いかにせん之餘情を含めんため也、昔の淑女の心ばえ、おもひみるへし、かゝるならばしなれば、往々鬱病にかゝる人もありし也、今の女には、鬱病にかゝるものゝ、皆無なるは、女徳のおとろへて、皆轉蓬者となればなり、故に今は置病などやむもの、比々みなしかり、是等の歌を煎じて、飲せたく物とおもへとも、今は千服々すとも、効なしと、さる人のいひて、慷慨一番せり、

源 道 濟

姫小松おほかる野邊に子の日して心に千代をまかせつる哉

正月の子ノ日に、小松を引て遊へは、已か心のまゝに、千代をふること哉となり、心のまゝに、千代契る哉といふへきを、かやうにいひたる、味ふへし、おほかるは、おほくあるの約也、

齋 宮 甲 斐

別れゆく都のかたの戀しきに、いさ結ひみむ忘れ井の水

むすふは、掬の意也、いざは、俗にいふヤレ也、忘井は、伊勢の名所也、やれ忘井の水を、手に掬て、試みむ、忘るゝ由もありなんと也、わすれられざるを、忘れんといふ、情の切なる也、

後山本前左大臣

恨みても戀てもへぬる月日かな忍ふはかりを慰めにして
人を戀ひ忍ふ計を、慰めにして、その人のつれなきを恨みつ、戀ひつ、月日をへぬることかなとなり、

神祇伯顯仲

風はやみとしまが崎を漕行けは夕波千鳥たち鳴く也、

はやみは、はやくある故にといふ心也、此詞、下の夕波云々にかゝる、波もたちあする物なれば、千鳥に合せて云るなり、としまが崎は、津國の名所也、實景の歌なるへし、

從三位賴政

山城の水野の里に妹をおきていくたひ淀の舟よばふらん

妹は妻を云、淀の渡舟をよひて、水野へ通ふ也、一誦すれば、妻愛の情、油然として起る、鬼神の心をも和らぐるは歌なりと云る、げにもとおもはる、

前參議親隆

松嶋やをしまが崎の夕霞たちひきわたせ海人の拷繩

松島、小島、みな陸奥の名所也、たく繩は、拷とて、楮の皮もて作る繩をいふ、古事記に、拷繩の千尋の繩、うち延へて釣する海人こみわて、海人の繩は、いと長ければ、長き事に云るは、常也、この繩のやうに、今一段長く引渡せと也、聲調爽朗、筆力雅健、所がらといひ、歌がらといひ、えもいはずめでたし、

伏見院

色かはる心の秋のつたかづらうらみをかけて露ぞこぼるゝ

つたかづらの秋に至て、うらかへり、色變りするやうに、人の心に、あきの生ずるまゝに、色に出で、見ゆるのみならず、うらみをさへ、掛けらるゝが、悲しさに、涙の露ぞこぼるゝと詠せ給ひし也、かけては、かけられて也、こなたよりかくるやうに、解くはわろし、人にしられすと云を、人しらすといふに同じ、況してつたかづらを、人の方にかけて詠せ給へるをや、是らは、正喻湊合の體ともいふへしや

二條院三河内待

秋の野の花分衣みやこまで、色はやつさじ見ん人の爲

やつすとは、その色すがたを變ずること也、化の字の意也、貴き人の賤き姿をするも、貧き人の富める人の姿するも、皆やつす也、花分衣の染りし色を、やつさで見せんといふ、やさしき心ばえにこそ

夢窓國師

忘れては世を捨顔におもふかな逃れずとても數ならぬ身を

夢窓國師は、一世の法燈也、その人の顯晦は、佛法の盛衰に關する也、然るに此歌をみれば、その謙讓斯の如し、扱後の人の遁世の歌や、辞世の詞をみれば、我こそ世の運命にかゝれなと云なせる、かたはら痛きわざ也、辞世などに、放言するは、決してその心に得たる所ある者の所爲にあらず、數ならぬ身故、大言壯語もて、人をおどし、已れをやつす也、此歌よく覺置て、慎むべき也、國師すら、時ありて忘れ給ひしぞや、況して國師ならぬ者は、常に我が心の色に見ゆるぞかし

土御門内大臣

逢見しは昔かたりのうつゝにてそのかねことを夢になせとや

逢見しは、昔語となりしかど、あひしことは、現にありつるを、其時兼て契りし言を、今は夢になせとやいふ、人の心の底ひしられぬとなり、人情澆漓の世は、みなかくのことし、治者は、政令を食み、紳士は然諾を食む、みな現の事を夢になすなり、

藤原伊光

紅のやしほの岡のもみち葉をいかにそめよと猶しぐるらん
やしほとは、物を一たひ染むるを、一入と云、いく度となく、そむるを、千入やしほといふ也、やは、いやの意也、やしほの岡は、山城の地名なり、これにかけたる也、天の人に重任を負はする、必かうやうの感慨は、あるもの也、喜びて受くべき也、いとふへからす、是人の逆境にたつ時の心法也、

前大納言爲宣

通路のなきにつけてぞ忍ふ山つらき心の奥は見えける

忍ふ山は、陸奥の名所也、かよひ路、おく、みな忍山に映帶せしむ、人富める時は、人情は見えぬ者也、一度貧賤に落ちて、かよふみちもなく、告ぐる所もなくなりて、忍ふ

／＼人の許に乞ひすがるに至て、初て人情の厚薄は、見ゆる也、古人も一盛一衰、人情
を見ると云り、つらき心は、氣の強き心を云也、

高階宗顯

くもるともよしや涙のますかゞみわか面影はみてもかひなし

よしやは、よしやいとはじの意也、涙のますを、ます鏡にかけし也、面影はのはもじは、
思ふ人の面影に向へて也、思ふ人の面影を見てこそは、かひもあれ、わか面影はと云也、

藤原俊蔭

花の散ることやわびしき春霞たつたの山のうぐひすの聲

花のちることやわびしきとて鳴くにやと也、立田山は大和也、心なき鶯に、ことよせて
花のちるを惜しむ也、わびしきは、物をふそくにおもふやうなる心と解するは、失意を
わびしきとも云、貧居をわびすまひとも云へは、當りぬいし、

藤原實清朝臣

くれてゆく年の姿は見えねども身につもりてそ現れにける

年の吾身に積りて老と成ぬるに由て、年の姿は、現はると也、

安法々師

夏衣まだ單へなるうたゝ寢に心して吹け秋のはつ風

此歌、法師の身にしてよき也、法師などは、秋立つと云ども、俄に單へより袷にうつら
れもせぬ也、さやうに、見ざれば、何の味もなきなり、

藤原實光朝臣

月影のさすにまかせて行舟は、あかしの浦やとまりなるらん、

月影さすを掉さすにいひかけし也、さて月の面白くさすにまかせてなかめゆく舟人は、
夜をあかすと云へは、明石の浦や、泊にてあらんと也、赤壁の賦に似たり、

小野良材

我戀はみやまがくれの艸なれやしげりまされど知る人のなき

みやまのみも、美稱にて、深山の意也、知る人のなきは、み山を受け、しげりは、艸を
受く、只戀のみにあらず、深慮ある人は、皆此のことし

從二位業子

物おもふ水上よりやなみた川袖にながる、物となりけむ
涙川の下に、のいで、といふ詞を加へてみるへし、あまりに涙の出つるにつけて、已れ
と答めたる歌也、

宜秋門院丹後

忘れじの言の葉いかに成にけむたのめし暮は秋風そふく
たのめしその夕方に、はや心がはりけむ、秋風のみ吹て、音信もなしと也、たのめは、
こなたよりたのむにあす、かなたより頼まする心也、君をわすれじとて、おのれに頼
ませし也、自の時は、麻行四段、他の時は麻行二段也、

俊盛法師

衣うつ音をきくにそ知られぬる里遠からぬ草まくらとは
草枕は、旅寢するを云なれば、旅寢にかへて、心うへし、所もしらぬ山路に、旅寢した
る時の有様をよめる也、法師なれば、此歌實際の歌なるへし、

永陽門院少將

あはれにも巡りあふよの月影を思ひいれすや人はみるらん
首尾を味ふへし、我はあはれに見れども、人はさは見すやあらんとなり、

花山院

木の本をすみかどすればおのつから花見る人となりぬへき哉
人は、境遇によりて、愚にも、賢にも、うつさは、うつさるゝ者也、木の下にすめは、
心なくとも、花見る人となりぬへし、此御製肝銘し奉るへし、すれはと起り、なりぬ
ると結ふ、是にて實際の御歌となりぬる也、氣をつくへし、

在原元方

あらたまの年の終になるごとに雪も我身もふりまさりつ、
なるごとにと起り、まさりつ、と結て、毎年年のふりゆくさまを、みせたる、妙也、何
の異なりたるふしも、なき歌なれども、感ふかし、その上、あらたまといふは、年の冠
詞なれとも、茲にては、終れば始まり、生まれは終るといふ終の字に響て、面白し、一

字を下せば、一字下したるほどの用無かるへからず、

大藏卿爲家

天の川秋の七日をながめつゝ雲のよそにもおもひけるかな

天の川にて、秋の七日に、二星の逢て別る、を、ながめて、雲のよそにもおもひけるかなと、結に哉の詞をおきて、今は、わか身の上となりぬること哉と、おもふ人にあひて、別れゆくを歎く意を含めし也、すべて、人の事と、おもふ事は、みな一たひは、我身の上知らるゝ物也、昔の聖のおもひやり、といふ事を、繰返し、の給ひしも、此故也、人の死にしを、笑ながら語らふ人もあるなり、情なき人とやいふへからん、

左近中將定親

さみたれに淀の川岸水こえてあらぬ渡りに舟呼ばふらし

是は、久霖水漲るをよめるなるへし、實況也、

藤原惟基

露をなどあたなる物と思ひけむ我身も草におかぬはかりを

あたとは、他をいふ也、薄情ものを、あだ人といふは、他に心の移りかはればなり、此身をおもへは、草に置かぬ斗が、露に異なる所にて、そのあたなることは、露よりもまされる物を、何とて露をこ、おのが身のあだにかはりやすきを、咎めしなり、曲折咏嘆、句々深致あり、

藤原菅根朝臣

秋風に聲を帆にあげてくる舟は、天の戸わたる雁にぞありける

雁を舟に譬へしは、その聲を雁櫓と文字にもかきて、櫓聲のやうにきこゆる故と云り、天の戸は、天門にて空のことなれども、茲は天河の水門に見る方よからん

遊義門權大納言

言の葉にそへても今は返へさはや忘らるゝ身に殘る面影

情の切なる時は、かうやうの愚痴なる歌も詠出づる也、故に情の溢ふるゝ所、義を以て制せざれば、その弊とどむへがらす、

源頼家朝臣

春霞かすめる方や津の國のほのみしま江の渡りなるらん
仄にみゆるといふを、三嶋江にかけたる也、

源家長朝臣

よしさらは身を秋風に捨果て、おもひもいれじ夕くれの空
秋の夕暮の空は、物悲しき物といふ、よしさらは、秋風の吹くに此身を任せて、何とも
我心に思ひ入れじと也、を、しき歌也、

三春有輔

君かうゑし一村すゝき虫の音のしげき野邊とも成にける哉

此歌は、有輔が友達の俊朝朝臣といふ人の住みたる家を、俊朝の身罷りける後に、秋の
夜ふけて、よそより歸るさに、かの前栽を見入て、よみたる由、詞書あり、俊朝と云人
は、薄命の人と見ゆ、哀れなる歌也、抑人生の浮沈榮枯、多くはかくのことし、返々も
徳をつみおくへきなり、

前僧正公朝

月草の花より衣かへす夜はうつろふ人を夢にみえける

月草は、露草を云也、その花にてすりたる衣也、衣を裏返してぬる時は、戀しき人を見
るといふは、昔よりの習はし也、此歌は、衣をかへして、他に心のうつろひし人を、夢
に見て慰むとなり、月草の花すりは、うつろふをいはんとてなり、僧正の身にして、か
やうのやくもなき歌をよむ、中昔よりの風俗ならはしといふ者の、實は興のさめたる歌也、只歌
をもて玩物にする故、かゝるあらぬ言の葉も、口はしる也、削るへし、

藤原長能

君か世の千とせの松の深緑さわがぬ水に影はみえつゝ

君か代の泰平を言はざたる歌なり、さわがぬの詞、眼目なり、

右衛門督通具

とへかした尾花か本の思草しほるゝ野邊の露はいかにと

とへかしたとは、問てくれと願ふ也、今の人は、此かしを濁りて唱ふる人あり、誤り也、
なもじは、語助也、思草に、己が思をよせたる也、上に尾花と云し故、下に野邊と云た

る歎、下に野邊と云し故、上に尾花を出したるか、是は何の故とも、心えかたし、將又、野邊の露に言よせて、おのかわび住居をとへかしといふにや、是亦心えかたし、尙、物しりにとふへし、

平 祐 舉たか

胸は富士袖は清見の關なれや煙も波もたぬ日そなき

ふじに煙、清見がせきに波とむかへたり、なみに涙をよせられたとも、清見の關は海にあらす、いかでか波と受くへき、且此篇俗体也、可厭、

土 御 門 院

槇向の檜原の山の呼子鳥花のよすがにきく人ぞなき

槇向のひはらは、大和の名所なり、呼子鳥は、古今集の秘傳とて、歌人は意味ありげにいへとも、深山にて一聲なき渡る鳥をきゝて、かく名付たる也、よすがは、便り也、花見にくれとも、その便りに、此鳥の聲をきく人そなき也、呼子鳥に、御意を深く入させ給しなるへし、世の人は、すべて心なき者也、焼野のきゞす、夜の鶴、梁の燕、深

山の呼子鳥、親をしたひ、子を思ふは、人間よりも深し、少し心を留めてみれば、亦以て天倫の至情を發するにたらん、然るに花見時と云へは、花の下によりつゞひて、酒のみ、歌うたひて、日の暮るゝも知らぬが、多かれとも、呼子鳥の一聲をきゝて、あはれと思ふ者、誰かある、花見る人、有れとも、此聲をきく人はなしと、言別けて、歎かせ給へる御意故、ぞもじを用給ひしなり、心をつけて深く味ふへし、

頓 阿 法 師

數ならぬ三室の山の岩小菅いはねはしたに猶亂れつゝ

數ならぬ身を、三室にかけし也、岩と云る故に、したといへとも、心の底を云也、猶はいよくの意也、身の貴き人は、直におもふことを言出づれとも、身の賤しき者は、憚かる所あれば、言出ぬ也、これによりて、いよくみたれつゝゆく也、是そ大亂の本るなりける、下情上達は、上の人をよくく嗜なむへきこと也、此歌、地方官たる人、紳に書しておくへし、

近衛關白左大臣

おのづから都にかよふ夢をさへまた驚かす峯の松風

かく山深く住めは、峯の松、肩を擁しけるうへに、偶、都にかよふ夢をみても、それさへ吹醒ますと也、人境に隔たりたる情界をよみし也、幽峭極まれり、

此選は緒言にも云る如く、良基公の選といへとも、一編何の起結もなく、且七分は戀歌を取りたるもうるさく、至て杜撰なり、されとも、人の頼みもだしかたく、あら／＼評註を加へしなり、

後選百人一首評註終

自讚歌註上

自讃歌註上

自讃歌註上

櫻、咲、遠、山、鳥、の、し、た、り、尾、の、な、が、く、し、日、も、あ、か、ぬ、色、哉、

人丸歌に、「足引の山鳥のをのしたり尾のながきなが夜をひとりかもねむ

露は袖に物思ふ頃はさそなおく必ず秋のならひならねと

さそなおくは、さてぞ此通にさおくの意也

思、出、る、折、焼、柴、の、夕、げ、ふ、り、む、せ、ふ、も、う、れ、し、忘、れ、形、見、に、

註云、此御歌は京極攝政うせて後、慈鎮和尚に遣はされ給し也とそ、或註云、後の御愁

傷をおほし出給へる時、柴の煙をみて詠給へるなり、后は通光の妹なり、此御歌は「思

出、る、折、焚、柴、と、さ、く、か、ら、に、た、ぐ、ひ、し、ら、れ、ぬ、夕、煙、哉、の、返、し、と、な、り、

なき人のかたみの雲やしほる覽夕の雨に道は見わねと

なき人のゆきし道は見えねと、その人のかたみの雲やしほるらんとなり、

見、る、ま、ま、に、山、風、あ、ら、く、し、ぐ、る、め、り、都、も、今、や、夜、寒、む、な、る、覽

註云、是は院の御かと熊野へ參給てよみ給へる也、

我戀は楨の下葉にもる時雨ぬるとも袖の色に出めや

註云、是はたゞ深く忍たる戀の心なり

袖の露もあらぬ色にそきえかへるうつれはかはる歎せし間に

きえかへるは、俗に沈みかへるなごいふかへる也、強く云る詞なり、

大空に契る思ひの年もへぬ月日もうけよゆく末の空

空の字、重りてわろし、上の句千代かけてなごあるべしや、その上、年もは、年はとす

へきにや、

詠めばや神路の山に雲消えて夕の空にいでん月影

瑞垣やわか世の始契りおきしその言の葉を神やうけ、ん

式子内親王

山深み春ともしらぬ松の戸に絶えくかゝる雪の玉水

詠めつるけふは昔になりぬとも軒端の梅は我を忘るな

註云、此歌は親王いつき宮におはしますときよみ給るにや

詠めわひぬ秋より外の宿もがな野にも山にも月やすむらん

下句意聞えず、月はすむなりとあるへきにや

桐の葉も踏分けがたく成にけり必ず人を待となけれと

註云、「我宿は、道もなきまであれにけり、つれなき人をまつとせしまに、此歌をとれる

にや

君待とねやへもいらぬ楨の戸にいたくなふけそ山のはの月

註云、「君こすは禰やへもいらじこむらさき我もと結に霜はおくともといふ歌をとれり、

忘れてはうちなげかるゝ夕哉我のみしりて過る月日を

註云、是はたゞ忍たる戀の心也、

玉の緒よ絶えなたえねなからへは忍ふることのよわりもぞする

生てよも明日まで人はつらからじこの夕暮をとはばとへかし

此歌、人の情をよくいへり、まちにまちても、とはねは、愛想も終につきぬるものなり、

故に愛想のつきぬうちに、人はとふへきなり、人はつらからじは、他人はつらくはおもはじと也。

夢にてもみゆらん物を歎きつゝうちゐる宵の袖のけしきを
それなから昔にもあらぬ秋風にいと、なかめをしつをたまきの緒環

註云、或註に、小野小町が「吹むすふ風は昔の秋ながらありしにも似ぬ袖の露かなとよめるを引てよめるなりとなり、それながらは、秋風は昔にかはらねども、その身に愁あれは、昔にもあらぬやうに覺ゆる也云々、

後 京 極 攝 政

みよしの、山もかすみて白雪のふりにし里に春は來にけり

註云、此歌は、「春たつといふ斗にや三吉野の山もかすみて今朝はみえけりの歌をとれり、あまの戸を推明かたの雲間より神代の月の影を殘れる

雲はみな拂はてたる秋風を松にのこして月を見る哉、
いつも聞く物とや人の思ふらん來ぬ夕くれの松かせの聲

註云、ある註に、「こぬ人をまつ夕くれの秋風はいかに吹けばか佗わづしかるらんの古今の歌を本歌としてよめる也、

我涙もとめて袖に宿れ月さりとして人の影は見えねと

註云、或註に「戀すればわか身は影と成にけり、さりとして人にそはぬもの故からの古今の歌をとりによめるなり、

いはさりき今こんまでの空の雲月日隔て、物おもへとは

註云、「今こんといひし斗に長月の有明の月をまち出るかなの歌をとれり、
わすれじと契りて出し面影は見ゆらん物をふるさとの月

人住まぬ不破の關屋の板ひさしあれにし後は唯秋の風
巡り逢はん限りはいつとしらね共月な隔てそよその浮雲

原註云、此歌は、忘るなよほとは雲井になりぬとも空ゆく月のめぐりあふまでと云る歌の心をとれり

春日山都のみなみしかそ思ふ北の藤波春にあへとは

原註云、藤家に南家北家あり、

前大僧正慈圓

いつまでか涙くもらで月はみし秋待えても秋そ淋き

註云、ある註に、無動寺の一流とて、慈圓の流あり、後鳥羽院御ほうびの人なり、

木の葉ちる宿にかたく袖の色をありともしらで行嵐哉

霜さゆる山田のくろのむら薄刈人なしに残るころかな

註云、淋しきを淋しきといひ、哀なるをあはれと云もあれど、かくのこことく何ともいほ

で、その面影侍るを、思分くへきにこそ、

野邊の露は色もなくてやこほれつる袖より過る萩の上風

思ふことなと問ふ人のなかる覽仰けば空に月そさやけき

註云、此歌は、中道觀の心と云り、或註に、無問而自説。稱歎所行道。道場所

得法。無能發問者。此二の文をよく思惟すへし

おしなへて日吉の影はくもらねど涙あやしき昨日けふ哉

世の中の晴ゆく空にふる霜の我身ひとつはおき所なき

岡のべの里のあるじを尋れば人は答へす山おろしの風

山里に契りし庵やあれぬらん待れんとだに思ざりしを

我頼む七の社のゆふ襷かけても六ッの道にかへすな

洛北に七社ありて、それをかりて、六道に墮在せしめ玉ふなど、神にいのる心なるへ

し、七六おのつから照應せり、

權大納言通光

三島江や霜もまだひぬ芦の葉につのくむ程の春風を吹く

三島江は、攝津の名所也、霜もまだひぬは、冬のけしき也、芦の葉には、そのあしのは

の角くむはこの春の初風はや吹わたると也、一陽來復の早きをいへる也、

むさし野はゆけとも秋のはてそなきいかなる風の末に吹らん

むさし野のひろきをゆきくながめたる歌也、秋興のかきりなき様目にあり、

明けぬとて野へより山に入鹿の跡吹おくる萩のした風

是亦見るやうなり、

明仄や川瀬の波の高瀬舟くたすか人の袖のあきゝり

あけかたの霧の間よりしろき袖の見ゆるは、高瀬舟の舟子どもの筏をくたすにやと也、

明仄のきりと、上下かけあはせて、意をとるへし、

月さゆる磯におりゐる濱千鳥跡ふみつけよ秋のかたみに

秋の月見したるしるしを殘さんと也、それを濱千鳥にいひよせたる也、

嶺越ゆる雲につはさやしほるらん月にはすてふ初雁の聲

聲の字いたつら也、ほすてふも、ほしたるとよむへき也、月にはしたる翼も、露けき嶺

の雲にはしほるらんと也、

詠わひぬそれとはなしに物そ思ふ雲のはたての夕くれの空

「夕ぐれは、雲のはたてに物おもふあまつ空なる人をこふとての歌をこれる也、雲のはた

ては、遠方をいふ也、第一第二の句意、重なれり、

限あれは忍ふる山の麓にも落葉か上の露ぞ色づく

忍ふと、色つくと、照合せて心うへし、忍れと色に出にけり、限あれはの心なり、

浅茅生や袖に朽にし秋の霜わすれぬ聲を吹くあらし哉

是は寄風懷舊といふ題にてよめりといへども、語をなさぬ歌也、

猶照らせ世々にかはらぬ男山仰く峯より出つる月影

意はあらはなり、男山は源氏の氏神なれば、猶照らせとなり、

権中納言通具

梅の花誰か袖ふれし匂ひそと春やむかしの月に問はや

この歌いとよし、

あはれまたいかにしのばん袖の露野はらの風に秋は來にけり

あはれまた野はらの風に秋の來て、袖の露けくなりぬるを、いかにしぬはんと也、

影やとす露のよすかに秋くれて、月をすみぬる小野の篠原

影やとす、月すみける、詞重なりてあし、

霜結ふ袖のかたしき打解けてねぬ夜の月の影を潔さやけさ

此歌、いたつら也、

野邊におく露のなごりも忍はれぬあたなる秋の忘形見に

すてられて怨みすの心に、かよひぬへし

冬の夜の禰覺ならひし槇のやに時雨のうへに霰ふる也、

此歌いとよし、たゞ槇の屋にのにははもじに改むへきにや

霜こほる袖にも影はやとりけり露よりなれし有明の月

寒きけしきをよめるなるへし、

木の葉ちるしぐれやまがふ我袖にもろき涙の色と見るまで

もろきをいはんとて、木の葉ちるとおける、面白し、涙はしくるを承け、色は木の葉を

うく、

おきかへし猶もる袖の涙かな忍ふもよその心ならぬに

涙をうらみたる也、

今こむと契しことは夢なからみし夜に似たる有明の月

契りしは、夢なから、うつゝにみし夜のすかたに似たるは、月なりとにや

釋 阿 俊 成 卿

昔思ふ草の庵のよるの雨涙なそへそ山ほとゝきす

聲きけは、いよゝ悲しくなるほどに、鳴くなど也、蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中、

の意也、

忘れじよわすれじとだにいひてまし雲の月の心ありせは、

御讓位のありける時の、御心をよめるにや、雲の月に心あるならはと也、雲は大内

山を申す也、

荒渡る秋の庭こそ哀なれまして消えなん露の夕暮

意は明也、

いかにして袖に光のやとるらん雲の月は隔てゝし身を

俊成卿の世をのかれ給ひし時のなるへし、隔てゝしば、へたてゝありしなり、

しめおきて今はと思ふ秋山の蓬がもどに松虫のなく

是も世をのかれし後のなるへし

嵐吹く峯の紅葉の日にそへてもろくなりゆく我涙哉

解をまたす

仙人のをる袖勻ふ菊の露うちはらふにも千代はへぬへし

うちはらふにもに妙ある也、

難波人あし火たく屋に宿かりてすゝろに袖の汐たるゝ哉

旅中の苦境を、なたらかにいひなかしたる妙なり、

立返りまたも來てみむ松島や小島の苦屋波に荒すな

名所を愛する心ふかし

散すなよしのゝ葉草のかりにても露かゝるへき袖の上かは

此歌意通せず

皇太后宮太夫俊成卿女

梅の花あかぬ色香も昔にて同じ形見の春のよの月

花も月も、みな昔の形見なりと也、原註云、此作者は、後には越部禪尼と云、俊成卿千載集撰せられし時、手傳したる人也、越部は、嵯峨にある地名也、さかの禪尼といふ人もあり、通具の妻也と、

面影のかすめる月を宿ける春や昔の袖のなみたに

昔をおもへは、涙の袖に宿る月さへ、かすむさまなり、

古への秋の空まですみた川月にこととふ袖の露かな

袖の露にやとる月に、むかし男の事をこととふと也、

惜むとて涙に月もこゝろからなれぬる袖に秋を恨て

詞通せず

色かはる露をは袖におきまよひうらかれてゆく野への秋哉

是も詞どゝのはす

ふりにけりしくれは袖に秋かけていひし斗を待とせしまに

面白くもなき歌也、

霜かれはそこともみえす草の原誰に問まし秋のなこりを

註云、狭衣の「尋つる草の原さへ霜枯て誰に問はまし道芝の露をとれる也とそしたもえに思ひ消なん煙たに跡なき雲のはてそ悲き

煙の雲となりても、跡なき物なればと、原註に解けとも詞たらず、

夢かどよ見し面影も契りしもわすれすなから現うつならねは

心明也、

自讃歌註下

自讚歌註下

宮内卿

かきくらし猶ふる里の雪のうちに跡こそ見えね春はきにけり

「八重葎しけれる宿の淋しきに人こそ見えね秋は來にけりといかにぞや、みなよき歌也、註に、雅經卿、下句をよみて、宮内卿に上句よませたる歌とて、「ともしせし端山繁山しのぎつ、秋には絶えぬ掉鹿のこゑといふをのせたり、是もいとよし、又宮内卿か歌に、「されはとて昔のしたとも急かれすなき名を埋む例なれば、是もよし
花さそふひらの山風吹にけりこきゆく舟のあと見ゆるまで

仰山なる歌也、

かたえさすあをのうらなし初秋になりもならずも風は身にしむ

ある註に、うへのきぬを、人のおしぬけ侍るなりと云り、襖をあをといふ、うへのきぬ也、それを梨にたとへし也、襖には裏なしと見ゆ、

心ある小島の海人の袂かな月やどれとはぬれぬものから
趣あり

月を猶待らん物かむら雨のはれゆく雲のするの里人
面白くつゝけたり

まどろまで詠めよとてのすさめ哉麻のさ衣月にうつ聲
あさのは、むたこと也、

立田山嵐や峯によわるらんわたらぬ水もにしき絶けり
わたらは錦中や絶なんを翻案せしなり

韓錦秋のかたみをたつた山ちりあへぬ枝もあらし吹也、
ちりあへぬ枝を吹ちらして秋の形見を断つと也、

霜をまつ籬の菊のよひのまにおきまがふ色は山のはの月
おきまとはする白菊の意ならへし、

きくやいかにうはの空なる風だにも松に音する習ありとは

待を松にかけたる也、おのれに誠あれば、人も誠あるへし

有 家 卿

朝日影勻へる山のさくら花つれなくきえぬ雪かとを見る

上の句、萬葉をとれる也、「朝日影にほへる山にてる月のあかさる君を山ごしにして、か
やうにとれるは拙なし

この秋のいつくれはてゝうす氷むすふ斗は山の井のみつ

秋はまたこのぬと思ふほとに、秋もすきて、冬になりぬと也、月日のはやきをうつせる也、
大淀の月にうらみて歸る波松はつらくもあらしふく夜に

伊勢物語に、「大よどの松はつらくもあらくにうらみてのみも歸る波かなをとれる也、
古歌をとりなから、詞とゝのはぬ故、何をいふにかあらん、拙き歌とはなれるなり、

花をのみ惜みなれたる三吉野の梢におつる有明のつき
梢におつる月もをしと也、

行年を小じまのあまのぬれ衣重ねて袖に波やかくらん

ゆくとしを惜むを、小島にかけし也、下はをしみつゝ年波のよるを、袖に波のかゝるに
いひよせし也、

物思はでたゝおほ方の露にだにぬるれば濡るゝ秋の袂を

大かたの人にて、秋の袂のぬるゝ物を、まして物思ふ人をやと也、を^ははに改むへし、

旅衣かへす夢路はむなしくて、月をそみつるありあけの空

衣をかへせは、おもふ人にあふといふが、こよひは、衣をかへせとも、夢にもあはず、

たゞ月をのみみつると也、

岩かねの床に嵐をかたしきて、獨やねなんさよの中山、

をゝしき歌也、

我斗思ふか物をとはかりに袖にしくるゝ庭のまつ風

物を思ふかを例用したる、力ありて、いとめつらし、

春の雨のあまねき御代を頼む哉霜に枯行草葉もらすな

かなは、なりとあるへきにや

定 家 卿

春の夜の夢の浮橋とたえして峯にわかるゝ横雲の空

しのゝめまで、夢をたえくに見ると也、

駒どめて袖うちはらふ影もなしさのゝわたりの雪の夕ぐれ

誠の歌也、歌はかくあるへきにや、これよりみれば、先の歌などは、大かたは、歌にあ

らず、萬葉に、「くるしくてふりくる雨か三輪か崎佐野の渡に家もあらなくに、註に、此

歌は、本歌をとれる歌の本といへりこそ、

松かねをいそべの波のうつたへにあらはれぬへき袖のうへかな

うつたへは、不斷の義也、うちたへ衣などいへり、おもふ心のあらはれて、袖のぬるゝ

さま也、

年もへぬ祈る契ははつ瀬山尾のへのかねのよその夕暮

契のはてたるを、はつせ山にいひかけしと見ゆ、されどもあまりたくみて、心きこわす、

魔の歌也、

歸るさの物とや人の詠むらんまつ夜なからの在明の月

是はよし、

味氣なくつらき嵐の聲もうしなと夕暮をまちならひけん

まぢてもこねはかひなきにと也、

消わびぬうつろふ人の秋の色に身をこがらしの杜のした露

心は明也、

玉ゆらの露も涙もとまらずなき人こふるやとのあき風

註に、母のおもひによめるとなんとあり、いとめてたし、露もは、露の命もの意なれど、涙につけていふ暇のなきなり、

いつくにかこよひは宿を狩衣日も夕暮の峯のあらしに

おもひ子を旅にたてゝおもふにも、おのが旅路の行末にもかよふへし、また狩に出てゝかりくらしたるにもあるへく、結のにもじ、無用なり、詞たらずばあらしをこがらしとすへし、

袖に吹けさそな旅寢の夢もみじ思ふかたよりかよふ浦風

「戀わひて、なくねにまがふうらなみはおもふかたより風や吹らんをとれる也、夢もみねは、さそな吹けと也、

家 隆 卿

櫻花夢か現かしら雲のたえて常なき峯の春風

無常の春風にあひて、櫻花も夢うつゝの間に、ちりぬると也、註に云、作者は四十斗より勤能上手と也、初は俊成卿の弟子、後には俊頼卿のでしになる、中惡きによりて也、俊成卿の妻は、後に離別して寂蓮の妻となると云り、

いかにせんこぬ夜あまたの杜鶉またしと思へはむら雨の空

ある註に、「頼めつゝこぬ夜あまたになりぬれはまたしとおもふぞまつにまされるといふをとれる也、と、註に見ゆ、

昨日たに問はんとおもひし津の國のいく田の杜に秋は來にけり

いくたの杜を賞せし也、

ながめつゝ思ふもさひし久方の月の都のあけかたのそら

月宮殿に白衣黒衣の天人の舞ありといふ故かくよめるなるへし

下紅葉かつちる山の夕しくれぬれてやひとりしかのなく覽

ぬれてやさかのひとりなく覽とよむへき也、さひしき躰也、

思出づる身は深草の秋の露たのめし末やこがらしの風

頼めし人のこがらしの風に、我身の露のちる体也、

思出よたがかね言の末ならんきのふの空のあとの山かせ

あまり巧みによまんとて、詞通せずなりぬ、こゝろはかね言も風のあとなきやうになりぬるを、おもひ出よと也、

明けはまたこゆへき山の峯なれや空ゆく月の末のしら雲

是はいとよし、歌はかくあるへき也、

和歌の浦やおきつ塩あひに浮出るあはれ我身のよるへ知らせよ

浮出るとは、何物そや、わからぬ歌也

その山とちきさらぬ月も秋風もすゝむる袖に露こほれつゝ、
是も通せず、

具親朝臣

難波かた霞まぬ浪もかすみけりうつるもくもる朧月夜に

心あきらかなり

時しもあれ頼もの雁の別さへ花ちる頃のみよしの、里

時しもあれの五文字、一首の精神也、

敷妙の枕のうへを過ぬ也露を尋ぬる秋の初風

敷妙の枕、通せぬことば也、風は枕の上の露を尋ぬる也、

今は又ちらてもまかふしくれ哉、獨ふりゆく庭の松風

ちらてもは、さらてもなるへし

晴曇る影を都にさきたてゝしぐると告る山のはの月
都にといふ、ことくし

遠さかる雲井の雁のなごりさへかすめはつらき難波江の月
心あらは也、

詠めよと思はてしもや歸るらん月まつうらのあまの釣舟

おもはすしもとあるへき也

木からしよいかに待みむ三輪の山つれなき杉の雪折の聲

いかにまちみむ、心分明ならず

月の秋は名のみそ夜の藻鹽草かくうきたえて見る夢もなし、

月の秋は、ぬるよなしと也、

又もかくうきて世にふる例ありやたよふ雲の跡のむら雨

雅經朝臣

白雲のたえ間になひく青柳のかつらき山に春風そふく

うつくしき歌也、

尋ねきて花にくらせる木の間より待としもなき山の端の月

おもひもよらぬけしき、いと面白し、

絶えては思ひありともいかにせん萍の宿の秋のゆふくれ

上の句通せず、たわての間にはもじを脱せるにや

拂ひかねさこそは露のしげからめ宿かる月の袖の狭きに

さこそば露のしげからめども、この狭き袖に、月の宿るか、さては、拂かぬるよと、月

をめてしなり

うつりゆく雲に嵐の聲の聲す也ちるかまさきの葛城の山

氣高き歌也、

いたつらにたつや淺間の夕煙里とひかぬる遠近の山

煙のおのがたよりともならぬをいへる也

秋の色をはらひはてよや久方の月の桂に木枯のかせ

桂の葉を吹はてよこそいよよ月の明なれと也、

なれくみてみしは名殘の春そともなとしら川の花の下風

是は最勝寺の鞠のかゝりの櫻かれて、直されしとき、過し年の春ことに立なれし、此木の下の名残をおもひてよめるこそ

君か代にあへる斗の道はあれと身をは頼ます行末の空

歌鞠の兩道、時にあひぬれと、行末の身まては頼まれすとの心とかや

草枕結び定めんかたしらすならはぬ野べの夢の通路

旅になれぬ心なるへし、

寂蓮法師

今はとてたのもの雁も打わひぬ朧月夜の明ほの空

春の夜のかきりを雁までもをしむころなるへし

葛城や高間の櫻咲にけりたつたのおくにかゝる白雲

風調絶世三躰の春の歌也

物思ふ袖より露やならひけむ秋風ふけはたえぬ物とや

たえぬものこやは、おかぬ日はなしといひたし

ちりにけりあはれうらみの誰なれや花の跡さふ春の山かせ

山風にちりにけり、これをうらむるは誰なれやと問は、我なりこのころにや、詞と

のはす、

むら雨の露もまたひぬ槇の葉に霧立登る秋の夕暮

此歌名高きほどありて、いひしらす、哀深し、

さひしきはその色としもなかりけり槇立山の秋の夕暮

是も

うらみわひまたじ今はの身なれとも思なれにしゆふくれの空

おもひなれにしゆふくれの空なれば、淋しき事もあるましきをや、

思ひあれは袖に螢をつゝみてもいはゞや物をとふ人もなし

「つゝめともかくれぬものか夏虫の身よりあまれる思ひなりけり、この歌とくらへて、

その巧拙をしるへし、

里はあれぬむなしき床のあたりまで身は習はしの秋風ぞ吹

是も詞どゝのはす

老の波こえける身こそあはれなれことしも今は末の松山

藤原秀能

夕月夜塩みちくらし難波えの芦の若葉にこゆる白波

若葉をとあるへし、

足引の山ぢの苔の露のうへに禰覺夜深き月をみる哉

禰覺夜深き詞つまりてあし、

月清めは四方の浮雲そらに消えてみ山がくれをゆく嵐哉

見るやう也とかきて、註をみれば、それにも、妙なる者こそ、

草枕ゆふべの空を人とはなきてもつげよはつ雁の聲

なきても、いたつら也、

下紅葉うつろひゆけは玉鉾のみちの山風さむく吹らし

たゝこと也

藻鹽焼あまのいそやの夕煙たつ名もくるし思たえなく、

心明也、

袖の上にたれ故月はやどるぞとよそになしても人のとへかし

よそになしても、いとよし

露をだに今は形見の藤衣あだにも袖を吹あらし哉

袖をふくなとこそいふへけれ、

山里の風凄まじき夕くれに木の葉みたれて物を悲しき

かやうに淋しくは里近くすみてよき也

今こんど契りしことを忘れすは此夕くれの月やまつらん

西行法師

よし野山櫻か枝に雪ちりて花遅げなる年にも有哉

詞をつくるはす、さすがに、法師か歌也、

なかむとて花にもいたくなれぬればちる別こそ悲しかりけれ

なかめつゝとあるへきにや、

哀れいかに草葉の露の氷るらん秋風たちぬ宮城の、原

是もよし

月みむと契りて出しふる里の人もやこよひ袖ぬらす覽

月みばとあるへきにや、

蛩夜さむに秋のなるまゝによわるか聲の遠ざかりゆく

尤よし

津の國の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡る也、

夢なれやは夢のやうなれはにや、はや蘆のといふころ也、

年たけて又越ゆへしとおもひきや命也けり佐よの中山

西行東へ再下りし時の也とそ、吾常に此歌に感深し、

風になひくふしの煙の空に消えて行えもしらぬ我思哉

空想をよく寫せるといひつへし

山里に浮世いとはん友もがなくやしく過ぎし昔語らん

よし野山やかて出しとおもふ身を花ちりなばと人や待らん

やかての詞、耳たつ也、

西行の歌、ありのまゝによみ出て、詞透り意深し、京極黄門は、天下の歌を西行よみ

直したりと申されしとぞ、先々の歌どもをよみて、こゝに至れば、げにもさることゝお

もひ合せらる、これこそ眞の歌人とこそいふへけれ、かの例の歌ともは、みな是魔の歌

也、火に投すへし、

宗祇が跋に、人の懇望辭しかたく、粗愚意を述ふとやうの奥書ありて、文明十六年霜月中

旬宗祇判とあり、注は宗祇のなるへし、總じていはゞ、おびたゞしき自讃の歌なれども、

詞意ともにすぐれたるは、十首を出でず、その中、かなしき歌のみにて、やゝもすれば、

袖に涙といふ、されども人の涙はかやうに出つる物にあらねは、皆空涙にてうそなり、し

かるを人を戀ふとは、涙を口にする、是いつれも、中古佛法の盛なりし餘弊にて、をゝし

き大和心を失ひはてぬる、いとあさまし、されは、よむにもたらぬことなれども、人のこ

の本を見せけるを、たゞに返へすもとて、かくは沙汰しつる也、

丁未歳七月十七日

雲

菴

識

刪
修
君
臣
歌

刪修君臣歌

廣澤先生菅神の靈夢を蒙りて、伊呂波歌の外に、君臣歌といふを新に作出されしは、誠にこよなく芽出度けれども、下一段尙如何とおもふしなきにしもあらず、よりてその歌どもを先にあけて、刪修の歌を後に記し、世の博雅に質さんとす

君 臣 歌

細 井 廣 澤

いろはの歌は、空海の初て唱へしより、千載これを用て、其徳廣し、然るに諸行無常の四句を本として、神道儒教の旨にあらず、知愼芳野耕雲のいろは傳を、師家より受くること久し、よりていろはの起りし所、文字の宗とする所、その大槩を聞知る事あり、今此歌を綴ること、實に僭踰の罪淺からず、されども思廻せは、小學の初に筆をとりて、先色は勻へど散ぬるをと書習ひ、教ふること、吉祥とも見えす、知愼かくおもふのみならず、四十年計のむかし、人ありて神道の意として詠めるありき、を、お、い、ゐ、へ、えを分たす、古風として自讃せしが、世に傳はる事もなくなりぬ、今此に綴る所は四十七音を備へて、空

海の法に順ひ、定家卿の式に違はず、世俗の通用聊もさゝはりなし、但知愼が凡劣淺陋をもて、人の信用せざらん事を奈何ともすることなし、むかし秦の呂政が頑くなる時にだに、程邈隸書を作りて献じければ、便なりとて取用ひ、零陽の獄中より出されにき、其文字萬國に盛にして、古今の模範となれり、今此用ふる所の假名も、まさに隸法の草藁なり、知愼いかでか程邈の才にたぐふべき、なれども、此歌の起る所、誠に感得する事あり、知愼幼稚より 菅神に傾き禱る事切なり、廿歳計の時、夢に 神像に讚して云、禍福正是身自取、秋風一抹氣味清と、其外異夢感應少からず、今年中秋の夜、夢に神人と思しき公卿、我書齋に入せおはします、右の御手に筆をもて、左の御手に帖をもたせ給て、きままくらおやこいもせにえとむれぬ、と高らかに仰せられぬ、其御聲耳に残る斗にて、夢は驚きさめぬ、餘りの有難さに、やをら筆を取て書留め、盟嗽して拜奉りぬ、黙坐して吟じ思へば、常にいろはの吉語ならぬ嘆あるに、今此 神言、同字なき事こそいぶかしけれ、又筆と帖とを持せ給ひしは、もしや此下をつゞりてよ、と神慮におもほしけるにや、知愼短才凡劣の身なれば、さる事のあるべき様はなきを、と信疑相半して、食を忘るゝ斗なりし、猶思

捨かねて、四十七の字牌を作て、神言十七を先すゑて、さて様々に敷返し思巡し侍れど、更に語をなさす、胸痛み眼しふり、頭髮忽に霜を重ぬる斗に、苦吟沈思して、三日夜にしてかく綴出し侍り、讀て見れば、神言に叶ふへくもなし、されど彼いろは歌さへ淺き夢みし酔もせずとある、其詞の發端にこれを比すれば、優美ならざるなし、今の歌も、るほりたうへてより後は、知愼が綴れる所なれども、文字に限ある事なれば、梁の周興嗣が千文作りけんに粗似かよへり、知愼か智力こゝに留まりぬる上、其詞幸にも不祥ならず、賦比の姿も聊備り、又警戒の心もあるべからん、さてもいろは歌は、國家風俗の最要となれる事、千載に涉れば、それを移しかへんことは、凡庸の人の思よるべきことかはと思へとも、とにかくに高貴に聞え上、又歳月を歴ば神慮も世に伸弘まるべくやとて、謹て淨書一通捧けて、參議菅公桑原長茂卿に呈し奉る、前年知愼が作れる鳥の跡を、故妙法院門主、仙洞に進せられし時、字様奇勝、叡感不斜と奉書下されしは、此卿にして、殊に 神感の今に著しき事を感嘆し給て、万乙奏 覽を歴たらんには、知愼か面目は、さる事にて、神言とゝもに萬世に傳りなん事、いか計の悦なるべきや、東武野人細井知愼百拜、

きみまくらおやこいもせにえとむれぬるほりたうへてすゑしけるあめつちさかゆよをわ
びそふねのろなは

きみまくらの序

原田主忠

世に廣澤と稱する善書の人、將軍家の與力、故細井次郎大夫也、姓は藤原、名は知愼、
字は公謹、もと洛西嵯峨の産にして、其居廣澤の池に近し、故にこれを以て別號とす、後
に其藝を以て、柳營に仕奉り、江都神田に家居して、専ら筆の道を世に弘め、從學ふ者い
と多し、且その才高く、その識博く、倭漢の學によく通せり、かつて空海法師の作りしいろ
はの辞は、偏に佛說無常の理に據たるを、手習ふ人の初にするは、ふさはしからぬ業なれ
は、此四十餘り七字を、いかにもうるはしき詞に換へまほしく思て、心をさまゝに巡ら
し、詞を幾度か改めぬれど、半はなりて末遂がたく、晝は筆を指置ことなく、夜は枕を安く
することゑえす、或時思ひくんじて、まどろみたるに、かけまくも畏き菅原の御神、衣冠
儼然として、知愼か前に來り給ひて、頓て下をつぎ給ふと見て、夢覺ぬ、此時神の惠み身
に餘り、喜の涙袖につゝみがたく、急き燈をかゝげ、筆とりて書付くるに、誠に神助にあ

らでは、豈にかゝる妙なる詞を得ることあらんや、世降るといへども、此神在すが故に、
此道の地に未だ墮ざる事を知れり、或人のいはく、足下の志は、遂たり、さはあれど、世
に久しく崇尊ふ弘法大師の作りし詞を、今更改かへんこと、その憚なきにあらずやと云、
その責、故なきにしも非されは、暫したためらひながら、願くは顯貴の人の一言を得て、我
志を定めてん、とよき紹介によりて、近衛殿下に捧ければ、公も手をうちて感服し給ひ、
辞をも添へ賜はん事になりたるを、その頃廣澤世を早うして、その本意終に成らず、惜む
へし、痛むへし、予駿河吉原の驛に旅寓の折ふし、此談を渡邊蕃に聞て、心に聊叶ふこと
あり、よりてその序を作り、且註を加へて文匣のうちにひめ置のみ、敢て大方に示さんこ
にはあらずなん、

延享五年戊辰夏六月下浣

原田主忠識

君臣歌、此歌を、きみまくらといふは、初の五字をとりて名付くる也、論語の學而、爲政
などの篇名に同じ、是則ち長歌の體裁也、故に八句、各五七の字數を用ふ、いろはの詞の
章を成ざるに勝れりといふへし、

きみまくら、きみは、君、まくらは、臣等也、臣等をまくらとよむこと、紀淑望が古今和歌集の眞名序に見えたり、

おやこいもせに、おやこは、父子也、いもせは、夫婦也、妹背と書く、には、てにをは也、えとむれぬ、えとは、兄弟也、兄の字を、えと訓み、弟を、おと、云ふ、日本紀、神武紀に、兄猾、弟猾、兄磯城、弟磯城といふ者あり、こゝに只と云は、おとの上畧也、今十干をさして、えと、云も、きのえは、木の兄、きのとは、木の弟と云意也、むれは、群也、ぬは、てにをは也、畢りぬのぬと同じ、以上君臣父子夫婦兄弟の倫を云て、群の字の中に、又朋友も、おのづから籠れり、是則ち五倫也、天下の廣き、人民の多き、濱の眞砂よみ盡しかたしといへとも、一人も此五倫の外に洩るゝ物なし、
ぬほりたうへて、ぬほりは、井堀り也、たうへは、田植也、ては、てにをは也、夫人民は、水穀を以て生活す、故に上を受て、これを云、且堯の民の鑿井而飲。耕田而食。帝力何有。於我。こ、はらつゝ、みうちて歌ひけん、上古の風もよそならず、
するしげるは、未茂る也、是は民草の生出て、いやましに繁茂するを云也、

あめつちさかゆあめつちは、天地也、さかゆは、富貴の意也、天地の間、萬物富榮にしてひとつもたらぬことなき也、

よをわびそ、よは世なり、を、てにをは也、わひそは、勿訛也、世をわぶることなかれと也、佗は憂ふることを云、人はとかくわが世のまゝならぬを憂ふる也、一身の欲する所を遅くして、世を終ふる迄、足ることをしらす、故に天地の廣きをも、自ら狭くし、萬物の用の足るをも、猶欠くることありとす、天地の間、萬物富榮にして、人民の用ふる所、水穀、宮室、衣服より、一切の器物に至るまで、萬事自由ならざることなく、水行に舟あり、陸行に車あり、又何をか憂んや、しかるに、我世をいたづらにわぶる者は、實に天地の恩を知らざるもの也、この故に、これを戒てしか云る也、

ふねのろなは、ふねは、舟也、ろなはは、櫓、繩也、繩は、帆繩、碇繩、などを云、是は、上に述ふる所の水行には舟あり、舟にはまた櫓繩ありて、よく用に叶ふことを云て、その餘を廣く兼ねる也、

是世に行はるゝいろは四十七字を、かなたこなたに組かへて、此歌を作りし也、その説は、

己に序中に云り、

刪修君臣歌

稼堂處士

廣澤先生の序にも云るごとく、君臣歌は、菅神の靈夢に感じて、三日三夜、心血をからして、詠出られし歌にて、殊に神言の十七文字を頭にすゑられたるなれば、誠に凡慮の及ぶ所にあらず、されども、たうへてのうへては、うゑてとなくては叶はず、その他、ふねのろなはなごも、打見たる所にては、何となく突然にして、語をなさぬやうにも覺ゆかし、是かた／＼改めずては、白璧の微瑕ともいふへく、返々をしき事也、されども、一所を改むる時は、その他も、みななくづれ出て、つまり下半篇は、みな改めざるをえず、されはとて、それを改めんは、容易のわさにあらず、はた又先修に對しても、不恭の罪逃かるまじく、殊に下の句の語勢によりて、神言までにも及ぼさんは、いよく、恐多き事なれども、その佞臣たらんよりは、忠臣たらんは、神慮にも叶ふへく、先修の本意も、こゝにありぬへければとて、百方苦心、一日一夜おもひめぐらして、十數回改めて、左のことく改めたり、尙この上は、大雅の教をも乞はんとはおもへども、今その改めたる所を聊註して、姑く家の

兒童に示すになん、

きみまくら、おやこいもせ、えとむれて、おほりたかへし、あめつゆに、をぬのわさねふ、すゑはなよ、うちそろひける、

註おやこいもせは、六字句なれば、よむときいもーと音を引て七字にする也、

たかへしは、田を耕す也、原註に見合すへし、をぬは、小野也、むかしは、野ののをぬといへり、普通也、わさは、わさ田のわさにて、早きをいふ也、早稻をわせといふ、わさと普通也、ねふは、いねふの略也、稻生也、地名にもあるは、これなるへし、生をふといふは、園生、蓬生、淺茅生、などの類也、はた又、物のおとなしくなりゆくを、ねびゆくともいへは、稻の雨露にあひて、生長繁茂する意も、その中にあるへし、その時は、ねひねふと活く詞なり、すゑはなは、稻の穂末に花咲の意也、萬葉に、末つむ花とあるは、紅花をいふ也、是その詞を略したるにはあらず、この末といふに、おのづから晚稻も含まれぬへし、花よのよもじは、語勢上おのづからけるのかゝり詞ともなるへし、思ふに、我邦は、昔より瑞穂の國と稱すれば、上文の田を耕すと云より、雨露小野に移り、早稻、晚稻の雨

露の恩を受けて、次第に生長花咲て、豊年満作の躰なり、其中に國民の皇恩に沐浴し、一家打集て、太平を歌ふ意も、おのづから打揃けるの詞に籠りて、起結照應すへきにや、

附 谷川士清伊呂波歌

双樹落葉ニ載ス

あめつちわれ、かみさふる、ひのもととなりて、ゐやしろを、おほむへ、ゆには、うらまけぬ、これそたえせね、すゑいくよ、かうやうに改作したる人もありけり、

刪修君臣歌 終

昭和六年六月二十日印刷
昭和六年六月廿八日發行

著 者

黒 本

植

金澤市長町七番丁三番地

印刷者

林 秀

松

金澤市長土塀通廿二番地

印刷所

林 兄弟印刷所

金澤市下本多町三番丁九番地

發行所

稼堂叢書刊行會

156
113

156
113

【第四回配本】

